

中京大学 企業研究所 主催 公開講演会

やさしい気持ちが見らいつくる

— 人を信じ切る心の経営 —

株式会社宮田運輸代表取締役社長
一般社団法人こどもミュージアムプロジェクト協会代表理事
宮田博文

運送会社というと、皆さんどういふイメージを持たれてるでしょうか。トラックは危ないとか、怖い、こういうイメージが先行すると思います。事故があったときに報道されるのは、逮捕されたトラック運転手と表現されます。私達のトラックを画面で見てくださいと思います。トラックの背面には、子供の描いた純粋な思い、絵やメッセージが大きく引き伸ばされ、トラックの背面にラッピングされております。これは、自社のトラック1台でやり始めた活動で、この活動を“こどもミュージアムプロジェクト”と称し、8年前に自社のトラック1台から始めた活動であります。なぜそのような活動をはじめたのか。そのプロセスや夢をどのように描いているのか。また、社内の経営者の心が変われば経営が変わる。従業員が変わる。そんなところを、この取り組みで報告、紹介をさせていただければと思います。

まず最初に会社の案内の動画を見ていただきたいと思います。

私は運送会社を経営させていただいてまして四代目です。64期目となります。愛知県にも事業所がありまして現愛13拠点、東は福島県から西は福岡県まであります。従業員数は350名。およそ200台余のトラックを保有しています。愛知県にも小牧事業所と半田事業所の2つがあり、愛知県も第二の故郷という感覚であります。皆さんも小さい頃、夢



があったと思います。私の夢は、幼い頃、トラックがめちゃくちゃ好きでした。“めちゃくちゃ好き”。多分この場の中で一番好きとありますが、めちゃくちゃ好きでたまらなかったですね。大きくなったらトラック運転士になりたいという、そんな夢を抱いて一念で育ちました。ちなみに私達は「運転手」と表現しないで「運転士」と表現いたします。

18歳で運転免許を取得し、憧れでありました株式会社宮田運輸に入社をいたしました。ものすごく嬉しく、今でもその時の思いは忘れもしません、平成元年3月の20日、高校を卒業する前に入社をさせていただきました。ちょうど20名程の従業員がおりました。自分の夢が叶った喜びで一杯でした。これで全国をトラックで駆け巡ると。

でも、その入社した時は、うちの会社にとって一番の逆境と言いますか、困難と言いますか、9割のお客様がなくなってしまうか



もわからない、そういうタイミングでした。その頃の父親が、今でのその頃のことを思い出すと、本当に寝れなかったと未だに言います。けれども、9割のお客様がなくなってしまう。でも、18歳の自分はですね、自分の夢が叶った喜びで一杯でした。めちゃくちゃ、嬉しくて仕方がない。そんな中、ある食品のメーカー様から救いの手を差し伸べていただきました。「宮田運輸さん、トラックを一台、専属車としてうちの仕事を手伝ってくれないか」とおっしゃっていただきました。親父はですね、藁をもすがる気持ちで「行かして下さい」と返事しました。しかし社内を見渡して、その頃のそのお仕事が、手積み手降ろしの重労働で、誰も社員が行きたがらなかったんですね。そんな中、白羽の矢を立てていただいたのが18歳、免許取りたて、車もろくに乘ったことがない私でした。

親父から言われたのはたった一言。仕事は2度断わるな。2度断わったら二度と仕事はもらえなくなる。とにかく笑顔で、緊急な仕事でも、嫌だと思ふような仕事でも受け続ける。信用、信頼を築いて来いということと言われました。そこから365日24時間働く日々が続きました。一生懸命やりました。その当時のトラックのドライバは、ねじりハチマキに雪駄履きっていうものがありまして、お客様から渡された伝票を、「こんなもん行けるかっ！」て、放ってたんですね。放られた伝票を1枚ずつ拾い集めて、「行かせて下さい」と言っておりました。作業服を着て、

ヘルメットを被って、あご紐をし、重たい安全靴を履いて一生懸命やりました。そのように続けていると、「宮田運輸さん、もう1台専属車として入れていいよ」おっしゃっていただきました。めちゃくちゃ嬉しかったです。これで親父から褒められる。でも、社内を見渡しても誰も行きたがりませんでしたので、中学1年生の僕の親友である福田を誘い、一緒に働いていただきました。半年後に親友と2台になりました。このように遊びか仕事か見分けのつかない行動を、毎日毎日しておりました。楽しくて仕方がありませんでした。こうやりますと、「宮田運輸さんもう1台入れていいよ」。そのうちに3台が5台、5台が10台、10台が50台。どんどん仲間が増えていきました。仲間と突っ走りました。その頃の私達の信条は「一心不乱に一生懸命」。とにかくお客様の言うことを二つ返事で受け続けよう。そうやってですね、やらせていただくことになりました。

そのように続けていると、皆様方と一緒にぐらいの年代の、私が23か24の時に、また親父から呼ばれました。「明日からトラック降りろ」と言われました。トラックに乗るのが嬉しくて仕方がないのに、トラックを降りろと言われたんです。

私は四代目なのですが、宮田運輸は、祖父が創業いたしました。徳島県でトラック1台、7人の子供を食わせていかなくちゃいけないという理由で、お下がりトラック1台持ってきて始めた仕事です。7人の子供の長男が二代目、私から見たら叔父さんでした。叔父さんは作業服姿で6時半に毎朝出勤して、従業員を見送るという、本当に人を大切にするかたでした。この二代目の叔父さんには、娘婿がいましたので、その娘婿が三代目として入ったので、彼らがこの会社を継いでいくという状況でした。私はまだ23歳ぐらい、まだまだそんなことになる年齢ではなかなのです。でも、その次期社長っていうのが、失踪してしまいました。突然。未だにど

こ行ったか分からない。そういう状況の中、親父から呼ばれまして、明日からお前が所長やと言われました。トラック降りろと言われまして、分かりましたということで辞めさせていただくことになりました。想像して下さい。お客さんとですね、折衝しなくてはいけない。従業員がいて。どこへ行ってくれとか、あそこへ行ってくれとか配車しなくてはならない。従業員の人と、どう接したらいいか分からない。そのような教育も受けていませんでした。その頃のことを思い出すと、本当に歳を重ねたいと思っておりました。もっともっと、10歳も20歳も早く年齢を重ねたい。そんな中、どう人と接したらいいの分からないものですから、従業員を上から目線で命令口調で指示しておりました。そして気に入らへんかったら帰れ。俺が走るからと言っておりました。何人も従業員が辞めていきました。昼間にトラックを蹴って、「こんなもんやっつけられるか」って言ってですね、辞めていきました。何人とも喧嘩もしました。女性ドライバーも入社し、彼女がですね、辞め際に、私に向かってこう一言、いいました。「所長はお客様第一、お客様第一って言いますが、本当に大切なのは従業員じゃないでしょうか」。泣きながら言い、辞めていきました。まだあの言葉が脳裏に焼き付いています。従業員が大事だからこそ、お客様第一と言っている。それが中々伝わってませんでした。そんな中、阪神淡路大震災を経験を致しました。被災地に救援物資として、水を運んでくれないかとお客様から依頼がありました。行かしていただきますということで、部下であるドライバーに言いました。被災地ですから、昼夜かけて山越えして入るわけですから、中々、皆行きたがりませんでした。不平不満、愚痴を言っており、私と喧嘩しながら仕事してるという従業員に、頼み込み行ってもらいました。一昼夜かけて神戸に入り、公園で被災された方に給水ということで、ポリバケツ、ポリタンクに水を配りまし

た。帰って来ては、また一昼夜かけて行きました。嫌々行ったドライバー、嫌々いつも仕事をしてると思ったドライバーの目つきが違うんです。顔つきが。「所長すぐ行かせてくれ。すぐ行かして」「いや、寝てへんからあかんやん。そんなん行かさへん」「すぐ行きたい」「なんでや」って聞くと、公園で水を、ポリバケツ、ポリタンクに配ってる時に水が切れました。切れたときに、被災された方が「兄ちゃん次はいつ来てくれるの?」と聞かれ、自分が答えられない状況でした。そんな中、「帰宅して自分が布団やベッドの中で寝ることなんかできへん。すぐ行かせてくれ」こういうわけです。同じような人で、いつも不平不満、愚痴を言ってるって思っていた彼が、目の色が違いました。そんな時に、少しですが気が付いたんです。ああ、人っていうのはこれ、上から目線で命令口調で言わされてですね、やらされるっていうことじゃなく、自らがやりたくなる、きっかけがあるなら、心の内側から内発的になるような動機。それは人から喜んでほしいとか、役に立ってるとか、そういったことを感じたら、本当に自分から自らやりたくなる、そういうものが湧き上がってくるんだなということに少し気が付きました。でも、それをどう組織にしたら、伝えたらいいの分かりませんでした。

そのまま月日が経ち、四代目とし社長を交代するタイミングをいただきました。ちょうど10年前になります。三代目を私の父親が



やり、父は従業員の誕生日に明石の鯛をプレゼントするという、従業員を本当に大切にする社長でした。四代目、新しい組織で、従業員も大事にし、その家族も大切にしよう。地域社会の皆さんや未来に生きる子供達も大事にできるような、そんな立派な会社をつかっていこうと。新しい組織で長期ビジョン、売上高がですね、何十期にはなんぼ、利益がこれぐらい、そういう計画を発表して、新しい組織でいざ走り出しました。その走り出した矢先、丁度9年前、暑さもが残る8月30日、私の携帯のベルが鳴りました。それは専務の福田、中学1年生の同級生でした。18歳からずっとやってきた彼がですね、専務として今やってもらってますけども、彼からの電話でした。電話の内容はこういう内容です。たった今事故があった。うちのトラックとスクーターバイクが接触して、スクーターバイクに乗っておられた43歳の男性が緊急搬送されたという内容でした。分かった。その病院へすぐ向かおうということで電話を切りました。病院へ向かう途中、鼓動が速くなってきました。大きなトラックとスクーターバイクの接触。大変大きな怪我をされてるのではないかな。すごく心配になりました。病院へ着きますと、その専務の福田と、担当の所長と一緒に合流して、案内されたのが霊安室でした。もう43歳の男性は息をひきとっておられました。そのご遺体を、ご家族が取り囲まれてる状態でした。私達はその扉の外で、その光景を眺めておりました。恐る恐る、恐る恐る名刺を差し出しました。受け取っていただいたのが、そのご家族の中で一番年長の男性でした。それは亡くなられた男性のお父様だったのです。お父さんは私に、こうおっしゃいました。わざわざありがとうございます。どっちがええとか悪いとか分からへんけども、たった今自分の息子が命を落とした。その息子には小学4年生の女の子がいる。孫がいたってことだけは分かっと思ってくれな。罵声を浴びせるとかですね、罵倒されるってそんなもん

じゃないです。優しい口調で私に真っ直ぐにそうおっしゃった。「誠心誠意尽くさせていただきます」というこの声が、届いたか届かなかったか未だに分かりませんが、私はそうお辞儀をし、その場を離れました。事故を起こした私達の仲間は、彼も43歳で同じ歳でした。女の子2人を男1人で育てておりました。一生懸命にお客様のため、会社のため、仲間のために働く管理職でした。当時は、忙しくてどうしてもお客様の荷物をお届けしなくちゃいけない。車が集まらないということで自分で配達に行った矢先に起こしてしまった事故でした。48時間拘束されますから、会えない状況でした。私達は彼の娘達が心配になり、そのまま専務と担当所長3人で彼の家に向かいました。家に着くと、一報を聞いた彼のお母様が出迎えていただきました。お母さんは私達に向かって、「この度はすいません、すいません」と、ずっと謝られるのです。「いやこれは会社が起こした事故ですから、社長である私に全部責任があります。彼が警察から出てきたら今まで通り元気に一生懸命働いてもらいますから心配いりませんよ」。こうお伝えしました。お母様はずっと謝られました。すいません、すいませんと。私達が車に乗り込んで立ち去るまでずっとお辞儀をされてる光景が脳裏に焼き付いております。車の中では沈黙が続きました。明日から誠心誠意尽くさせていただこうや。彼達と別れて一人になり、眠れませんでした。幼い頃からトラックが大好きで仕方がない。その大好きなトラックが、自分を信じてる仕事が、会社も、人のため世のためになるような立派な会社にしていこうとしている。従業員と毎日こうしゃべってる、語ってる。それが人の命を奪ってしまう現実を目の当たりにし、眠れなくなりました。どう考えていいのか分からなくなりました。でも、現場は動きます。そんな中、救っていただいたのが、人なんです。今日もたくさん仲間、友、先輩、先生方、たくさん関係性があると



思いますけれども、人なのです。一人で考えても分からないものです。人の本来持っている優しさに触れる機会をここでいただきました。いい時は、その関係は大事だよと、言葉で言うのですが、本当に自分が苦しく悩んだとき、救っていただいたのはそういう友達であります。私も経営者仲間がたくさんいました。お手紙をたくさんいただいたりメールを下さったり、本を送っていただいたり、時には遠い所から約束も無しで会社に来て自分の名刺にこう書いて下さる。たくさん対話も重ねました。悩み苦しんだ時に、僕はトラックが、人の命を奪ってしまうのだったら、世界中からトラックをなくしてしまった方が人は幸せになるんじゃないかと。こう思うようになり、そのようなトラックをなくそう、減らそうと思ったんです。

そんな中ですね、先輩の経営者に、こう言われました。「宮田君、トラック好きやろう」と。「そのトラックを無くすっていうことよりも、生かすって考えたらどうだ」。それが、私の心臓に突き刺さりました。そうかと。亡くなられた命は、尊くて戻らないのです。しかし、私達が生かされている命を、生かし合うことができるのではないか。トラックを、無くすよりも生かそう。たった一つ、この思いを、無くすから生かそうと、思いが変わった瞬間に、そこから見たり聞いたりするものが全て変わってきました。人の繋がりも全部、変わってきました。「大阪で宮田君、工場で安全標語が掲げているよ」と聞きまし

た。夜中2時ぐらいでした。これ当たり前やろと思ったのです。工場の安全標語。いやそれが違うと。その安全標語はそこに勤めている従業員さんの子供達が、一生懸命書いたものなのだと聞きました。一旦停止しましょう。構内速度5キロ以下。活字で、ポスターになっているのではなく、子供達が一生懸命に書いたものでした。ああ、これと同じことを表現してあっても、子供達が書くメッセージ、絵というものは、人の心に届くと直感で思いました。それで自社でも真似しようとそう思いました。事故というものは、宮田運輸だけ良くなっても、無くなりません。社会を良くしないといけない。社会を良くするためにどうしたらいいのかと、思いきり考えました。そう考えてる時に、トラックのドライバーが、いつも自分の誕生日に子供が、「パパいつもありがとう」とか、「ママ頑張ってる」。そんなメッセージを端くれではありますが、大事に財布の中に入れてあったり、運転席のキャビンやダッシュボードに飾ってある。これを見て、これやと思いました。これを社会で良くしないといけない。そう思ったときに、その子供達の絵やメッセージをトラックの運転席の中に留めるのではなくて、会社の中に留めるのではなくて、思いきりそのまま、社会へ出そうと思いました。トラックの背面にそのまま、ラッピングするアイデアを思い付きました。このたった1枚の子供達のメッセージで変わります。全く変わります。トラックの運転する運転士、ドライバー、めちゃくちゃ変わります。トラックも、雨降ってても洗ってます。風邪引くよって止めるぐらいに、いつもピカピカです。走り方も全く違います。口々に言うのは、子供を助手席に乗せて仕事をする感覚と言います。それぐらい全く違います。これでトラックを走っていると、交差点に止まっているおばあさんが、そのトラックを見て、手を合わせる。サービスエリアに止まっていると、若い人達に「写真撮っていいですか」と声掛をかけら

れます。高速道路で追い抜きざまに満面の笑みを浮かべて、ご夫婦が運転席に手を振って下さる。お手紙も沢山いただきます、「今日私、仕事でイライラしていました。帰り際、御社のトラックを見て大変心が穏やかになりました。頑張って下さい」などと。また、煽られません、全く煽られません。自分達の仕事の物をお届けする。皆様方の生活や、命を支え続けさせていただくという使命感の中で、365日24時間やり続けておりますけれども、走ってるだけで人の心が変わっていく。走ってるだけで人の役に立つのです。世の中のためになっているんだという実感が、その仕事の中で湧いてくると、仕事の仕方、働き方、大袈裟に言ったら生き方も変わってきます。上から言われて、客体でやらされるということじゃなく、主体、自律的、能動的に、内側から内発的に行います。皆はやりたい、やりたくないといひます。業界的に言うと、社会も同じで、どう人を管理するか、管理強化するか。事故があった時に、デジタルタコグラフ、GPSを付けて、どこを走ってるかって管理します。ドライブレコーダー、前向きに付けてた物を、今度は煽りがあるから後ろ向きに付けて、横向きにも付けて、今室内の運転席に向けて付けており、音声まで拾う。そんな時代に誰が、そんな音声まで拾って、ドライブレコーダーを自分の仕事してる間に向けられ、やりたい職業になりますかって。

僕達はそういうことじゃなく、人を信じたい。人の何を信じるか。人のどんな心にも、



優しい気持ちがある。真善美っていう美しい心がある。親和という良心、どんな人にも心がある。その心を自然に発揮する。そういう場、機会、タイミングを作るだけで、人はどんどんやりたくなる。自律的に主体的に思い、そこから全く変わりました。変えました。社内の取り組みもトラック1台にラッピングをやり、今こどもミュージアムプロジェクトと称してやらせていただいておりますけど、参画いただいている企業が現在250社になりました。850台のトラックが今走ってます。その会社ですが、愛知県が特に多いです。愛知県の企業の方に多く入って頂いております。トラックの納車の時に、今までと全く違う、普通のトラックの新車の納車で値段を叩いて、叩いて注文し、営業マンが「トラック持ってきました」と言ったら、「いやもうそこ置いとけ」って誰も見向きもされなかったと。でも、このトラックは紅白の垂れ幕をして、式次第を書き、自分の子供っていうのはもちろんあるのですが、地域の幼稚園、小学校に、お絵描き大会をして、その絵を、子供達がトラックにラッピングする、そういう活動もやっておりますので、子供達を呼び、感謝状を渡し、たった1台のトラックがなのですが、営業マンも涙するのです。35年間、25年間トラック売ってきましたけども、こんなに待ち焦がれてトラックを納車し、本当に人のためになったという実感があります。このトラックに乗るドライバーの気持ちは全く違います。子供達も自分が描いた絵が街中を10年間ぐらい走り続けるわけですから、自己肯定感も高まり、嬉しいことですよ。沢山、街中に、そういう取り組みを今、全国あらゆる所にさせていただいております。色々な形で、トラックだけではなく、色々な形で今広がっております。

日本全国の自動販売機、もう企業のアピールはいい加減良いのではないのでしょうか。日本全国の自動販売機が、子供の描くキャンパスになれば、交通事故はもちろん犯罪も少な

くなる。優しい気持ちが広がる街になるのではないか。介護施設のデイサービスの送迎車、ご利用者様のお孫さんが、一生懸命描いた絵。たくさん、職員さん方もそういう優しい気持ちがありますが、時間に追われると、気持ちが一瞬なくなる時がある。でも、そのご利用者様のお孫さんが描いた「おじいちゃん頑張ってる」という絵を、ラッピングにしたデイサービスの送迎車であると、そういう心また取り戻される、そのように言ってくれます。チェッカーグループのタクシーですが、東京で今やっけていただいております。重機では、福島第一原発の中に、廃炉に向けて命がけでやっけていただいている作業員の使用する重機に今やっけていただいております。バスは、色々な所のバスに、今取り組みをさせていただいております。タンクローリーも、今やっけていただいております。工事現場のフェンス、カラーコーン。色々な所の工務店では、家を建てる時の工務店のシートに、子供達が安全ということについて、やっけていただいております。自動販売機では、このような形で日本に1台、世界に1台の自動販売機があります。薬局の薬袋、薬の袋、「おばあちゃん来年も来るから元気出でてね」そんなかわいいメッセージが入っております。おばあちゃん方は、薬もらうとき涙するそうです。その薬を飲んだ後に、その袋を捨てられないということで、壁に飾ってあるとお聞きします。ベンチや、健康診断のファイルとか、もう至る所にあります。変わった所でいうと、カイロプラティックの白衣の後ろに、子供達が描いた絵があります。キッチンカーなどにも、もう様々にあります。こういう形での近江牛のカレーのキッチンカー。近江牛なのです。従業員さんの会社の休憩室は、今までは何々したらあかんとか、何々せいって、こう張り紙してあるじゃないですか。休憩室は従業員さんが集まると、不平不満、愚痴が収まらへんかった。でも、それを取っ払って、従業員の子供達に描いてもらった絵や、メッセージを

ギャラリーとして、幼稚園みたいですけども、張るだけで、その不平不満、愚痴がピタッとなくなりました。誰かが飴を持ってきたり、お菓子を持ち寄ったり、そのような優しい気持ちが育まれてますとお聞きします。

他にも様々な効果が沢山あります。2025年大阪で万博があります。それまでに日本中のトラック、バスやタクシー、自動販売機などを、子供の描くキャンパスにできれば、外国から来られた方に、この行動を発信していきたい、そんな思いであります。コラムもやっております。日本 IDDM ネットワークというもので、1型糖尿病の病気を抱えてる方で、甘いものとか食べれない方々に、彼らのメッセージ「チクンしないでお腹いっぱい食べたい」などのメッセージをラッピングし、走っております。中国でも行っけていただいております。この発信はすでに日本に留まっております。中国北京で9台走っております。この行動は国境越えております。子供達の純粋な思いというのは、中国で新しい工場を建てるのに、宮田さんのプロジェクト参画したいということ、求められております。以前、3,500名の中国の経営者の前で、お話しさせていただく機会いただきました。工場の壁面に、こどもミュージアムプロジェクトをやっけていただいておりますと発信すると、沢山の方に協会に入っけていただき、その後は、こどもミュージアムフェスタとして万博記念公園を貸し切って、やらさせていただきます。コロナで今は行えないのですが、全国のそのような子供が描いた絵や、メッセージをラッピングされたトラックを集め、開催いたしました。子供達に感謝状を渡したり、歌や踊りなどをやっています。こどもミュージアムプロジェクトは、現在どんどんと広がっており、社内の取り組みもまるっきり変わってきました。点呼というのを、運送会社はやらなければなりません。これは義務ですので、朝ドライバーが出社してきたら、アルコールチェックして健康状態記録し、検温す



るのですが、これをやってる側は全然面白くないのです。やられてる側も全然面白くない。私達は義務なのでこれをやっております。管理なのでやるのですが、それ以上にやっているのが、挽きたてのコーヒーを毎朝出というのをやっております。挽きたてのコーヒーを毎朝、ただ出すのではなく、300円ぐらいのプラスチックのタンブラーを購入し、従業員には内緒で家族に集まってもらい、家族の方にそのタンブラーにメッセージ書いてもらいます。写真とか貼り付けて。「パパいつもありがとう」「ママ頑張ってるね」「親父死ぬなよ」とかですね、そのようなメッセージです。世界で1つのマイタンブラーをサプライズでプレゼントいたします。プレゼントされたドライバーは、運転士が毎朝それを握りしめて出社してきたところに、私達が熱い挽きたてのコーヒーを注ぎます。これが私達の点呼です。気を付けていけよじゃなく、無事に今日も帰ってきてくれなっという願いです。家族と会社が一緒に願う、伝える。お前気を付けて行けよ、事故するなよじゃなく、今日も無事に帰ってきてくれなっという願いです。これを会社と家族が一緒になり願うのが毎朝の点呼です。管理ではありません。また歌も作りました、社歌。どのように、誰に作ってもらったかという、子供達に手紙を書きました。お父さん、お母さん達の応援歌を作りましょう。日曜日を使い半年かけて、グランドピアノを購入し、会社が集まっていたいただきました。メロ

ディーから、歌声まで、子供達に書いて作ってもらいました。宮田運輸こども社歌であります。これを、朝9時の始業前には3分間ありますので、3分前に自動で流れるようにし、会社中に、子供達の歌声が流れるようになっております。社長が朝礼で20分も30分もしゃべっても誰も聞いてませんけども、子供達の歌声が流れると、よし、今日も頑張ろう。今日も安全にと。これを内発的に心の内側から、涌き上がってきます。強制とか管理ではありません。このような機会をたくさん社内や社会に作っていいようではありませんか。自分達がやりたい気持ちになるというきっかけを、子供達のメッセージ、思い、歌声や姿、そんなところに触れると、自分の本来持って優しい心がどんな人も出てくる。それを社会にどんどん広げていいようではありませんか。

勉強会は今でもやっております。4年前からですが、人間学校を学ぶ「致知」という月刊誌があります。350名の従業員に毎月、全員に1冊ずつ会社が購入し配布いたします。難しい本ではあります。嫌や、こんな本読むために俺は会社入ったんちゃうって、色々言われたりしました。反発もあり、3人辞めましたけど2人戻ってきました。やはりそういう人間力を高めていくことは大事なことであります。また感想文を書き、事業所ごとにグループになり、感想文発表し合います。ルールはたった1つ。美点凝視、褒めるということです。「共感しません」って書いてくる連中も、今はいないですが、過去にはありました。「それでもお前ここに來てるだけでも偉いやん、素晴らしい」ってこう手を叩くわけですね。感想文は、毎月毎月出てきますが、人には無限の可能性があることがわかります。私は10年前にこれを勧められた時に、こんなもんだドライバーができるわけないやん。こんなんがそんなの読まへんねんと断りました。経営者がこれを断ると、人の可能性を閉ざすわけになります。これをやると本

当に感想文がで毎回毎回、ブラッシュアップというか、高まってきます。こんなことお前考えてるのっていうぐらいです。このような勉強会を、今社内でもやっております。フィロソフィ制作委員会というのを作り、宮田の哲学、考え方、苦学。社長がですね、成功体験としてまとめ、共有していくのはもちろん今までにあると思うのですが、私達はそのフィロソフィ、宮田の考え方というのは、現場にあるという、現場の何気ないところにスポットライトを当てます。制作委員会ですが全13事業所で、選抜された者が毎月集まり、うちの彼をスポットライト当て私達は動画にしております。ユーチューブ。これは例えば、構内でリフトマン（リフトオペレーター）が、自分の仕事、業務以外、遅くなったドライバーが、かわいそうやっていうことで、荷物を自分がやらなくてもよいのですが、自分が帰ってきたらすぐ積めるように整えておりました。これは普段見逃しがちですが、ここにフィロソフィ動画を作ります。そして彼をインタビューをします。「何でそれやろうと思ったん?」「いや、だって遅く帰ってきてかわいそうやんか、はよ帰って欲しいやん」と言うわけですね。素晴らしいなあ。3分から5分ぐらいの動画にします。これを従業員がいつでも見れる。家族も見れるようにし、世界に発信していこうとしております。これを毎月1本ずつ作ります。僕がいなくても、この宮田のフィロソフィはずーっと作り続けられる。あるドライバーが、納品先に行ったときに、順番待ちしをてました。前の荷下ろしをしていたら、ちょっと年配のドライバーが、荷物を下ろすのにリフトに乗らなければならない。でも、おぼつかなく。もたもたしている。皆知らん顔してたのに、自分が、「おっちゃん乗ったるわ」って言ったんですね。お客さんから怒られたんですよ。「お前人の荷物を預かって、お前こかしたら弁償できるんか。止めとけ」と。「でも、おっちゃん困ってるからやる」と言い行いました。帰

宅してからその運送会社の社長からお礼の電話をいただきました。「ありがとうございました。助かりました」。私達はそのことを物凄く褒めました。そしてフィロソフィにしました。インタビューすると、「何でそういう気持ちになったの?」「だって困った人おったら助けるのは当たり前でしょ」って力強く言うわけです。そうや、これが会社がですね。「お前それこかして弁償したら会社が損をするから、お前そんなことするなよ」って言うのではなく、私達はそういうことを人間として正しいと思ったことを、良心が、本当に思ったことを行動することを大事にする。

現場で管理職が駄目なところを見つけて、直そうとする目線から、全く逆になるわけです。いいところを見つけようという目線に。現場がめっちゃくちゃ暖かくなります。普通、現場って駄目なところを見て、直そうと注意しようとしてしまいますけれども、いいところを皆であげてくるわけですから、全く逆になります。この動画を作り続けます。1ヵ月に1本。もう本を唱和してってことじゃなく、今は動画でやっております。幹部会議というのは、会社には普通にあると思います。数字の会議ですが、部門別管理、13事業所ありますので、毎月どこの売り上げがどうだ、利益がどうや、お客様はどうだろうか。色々な問題を幹部会議で行っていたことをやめました。幹部とか幹部じゃないとか関係ない。管理職とか管理職じゃないとか関係ない。



い。全従業員自主参加、みらい会議っていう名称で、今やっております。8年ぐらいになります。何をやってるかは、立命館大学でやるんですが、いつも朝数字やります。事業所の報告なのですが、分厚い数字のデータです。これはパート・アルバイトさんも自主参加ですから、来たかったら来ていいんです。管理職だって来たくなかったら来なくていい。福島から、福岡から来ます。奥さんを連れて来ます。彼女を連れて来ます。そういう会議ですから、午前中は数字、昼からは心っていうことでディスカッションいたします。死生観とか、そういう身体っていうことで。皆でヨガをいたします。朝の9時からです。懇親会もありますから夕方6時、7時ぐらいまで人生を語り合います。これは外部の方も自由に参加OKなので、是非、皆さんにも機会があったら、毎月日曜日にやっておりますので、お越してください。ホームページから登録フォームがあります。外部だけで今60人から80人来ていただいております。大学の先生や同業の方、取り引きのない銀行、主婦の方が北海道から一人で来たり、最年長82歳、最年少中学2年生も一人で来ました。中学2年生一人です。宮田運輸の会議、みらい会議に来ます。もう会社のこと会社の中だけで考える時代は終わりました。皆で考えるような、そんな会社をつくらなければなりません。そのためには、目的が必要です。目的が。自社だけ良ければいい。自分のところの従業員や家族だけが幸せになったらいいという考え方だったら、誰も来るわけじゃないですね。でも、本気で社会や未来を良くしたい。そう私達は思っております。本気で。そう思ったときに、皆で応援してくれる数が、断然変わります。事故1つとってもそうです。宮田運輸の事故を今年もなくそうぜと。内向きに、社内向きに思いっきり力強く、なくした事故を還元するからという事だと思います。そうではなく、私達がやることが大阪の事故をなくせのではな

いかと言った瞬間に、大阪の人は応援してくれますが、名古屋の人は応援してくれない。僕達のやることが日本中の事故を無くせるのではないか。日本中の事故を無くそうと言った瞬間に、日本中の人が応援して下さい。世界中の事故をなくそうって言った瞬間に世界中の人が応援して下さいなんです。未来だったら未来から。経営者がどのマインドで、経営や仕事をするか、非常に大事です。やってることは身近なことをやります。目の前のことを一生懸命にやるのです。どの意識レベルでやるかで。人のご縁は全く違うと僕は思っております。経営観、機械的経営というよりも、従業員が命に見えた瞬間がありました。だから、生産性や効率で人の価値が計れますか。もっと言えばですね、生き物的経営。38億年の生き物に繋がるその存在。命って全部繋がった命ですよ。そう見たときに経営の目的はやっぱり変わると思います。そういう感覚で、今経営っていうものを捉え、やらせていただいております。

去年11月の1つ例を挙げると、21歳の女の子が入ってきました。宮田さん預ってくれ。21歳の女の子を。彼女は2歳で両親に捨てられて、児童養護施設で育ちました。自律して半グレに捕まり、覚醒剤中毒、入れ墨を入れられました。少年院に送られ、少年院からまた出てきたのですが、悪い友達に捕まり、最終的には路上生活者として保護されました。21歳の女の子ですよ。でも彼女にはたった1つ夢があった。「トラックの運転士になりたいって言うてるんだ。宮田さん預ってくれへん?」「もちろんいいですよ」僕達は特別扱いしませんが、もちろんいいですよ。去年の11月に入りまして、この5月に、3回目の入社、もう2回辞めました。2回辞めて3回目の入社です。僕達辞めるのも止めません。けれども帰ってくるのもウェルカムです。居場所をどんな人にも作ってあげたいのですよ。社会の底が抜けている。私達は社会の受け皿として、どんな人でも居ていいん



だよ。成果を生み続けないと、認めてもらえない。そんなことじゃなく、存在だけで素晴らしい、生きてるだけで。そういう連中はたくさんおられます。23歳で入ってきた男の子も、2時間かけて通勤しておりました。1年間通勤するだけで。皆で手を叩いて褒めてあげた。仕事らしい仕事もしてないですよ。本当に話もできない、できなかった1年間を、どこも就職できへんかったらお母さんが親子漫才でもしようやって笑っているみたいですね。

どこを受けても通らなかった。でも、1年間通い続けました、今日うちの本社へよく来たねと。1年後に何したい。「いや僕は数字が好きや」と。「数字は人を裏切るへん」とか言い、じゃあ経理やるかと。それから4年経ちますが、ものすごく優秀な人材に育ちました。社長この領収書は何ですかと言うぐらいですね、本当に優秀な存在。会社は人を早く一人前にしよう。なかなか待てないんです。でも、私達は違うのです。会社を続けるために人を採用して、人を育てるのではなく、会社を存続させるためなのです。人が先なんです。人が幸せになる経営というものをやらないと、会社を存続させるために人を雇ったり、人を育てたりするのではない。うちのドライバーは1回、求人出したら3人の部署に応募が100人来たりとかします。人を選ぶなって言ってます。抽選や、能力が高いから選んだりとか、そういうものではないんです。目的が違います。そういう感覚で、今

事業をやらさせていただいております。営業マンも一人もいません。一人もいませんけれども、売り上げも増えてます。こんな会社あるから宮田さんやってくれということで。大阪府の学校給食会、1,165校に、優しい気持ちの会社に給食を運んでもらいたい。そのように先方から問い合わせがありました。私達は営業マンはおりません。福島県の今富岡町は。原発帰還困難区域が解けました。人を呼び戻さなくてはいけないということで、働く場を作ろうということで。工業団地を整備して、工場を誘致しております。でも、浜通り、沿岸地域なので物流がないのです。10年経っても物流が構築されてないんですよ。佐川さんもヤマトさんも個人対宅配は入ってきますが、それ以外は、岩城とか郡山に取りに行かなければいけないとか、お金を出してチャーター便を手配しなければならぬ。そんな状態で工場を誘致できますか。宮田さん、関西から営利目的で来てる企業が沢山あるけども、このような本気で社会や未来を考えてる企業に来てほしいと。物流と一緒にやってほしい。行きましょうということで、私達は8,000坪、この4月からお借りして今900坪の倉庫を建築今予定です。来年建築されます。お客さんはないのです。お客さんいないんですよ。でも、どちらが先かですね。工場が先か物流が先か。僕達が行くことで工場誘致できるのであれば行きましょう。僕達が倒産、なくなってもこの倉庫はなくならんやろ、あるやろとそんな気持ちです。この福島を世界モデルに復興をし、本気でやろうということで今経産省とですね、復興庁と一緒にあって、関西の中小企業が一生懸命やっております。

何を本当に目的にするか。福島も、FUKUSHIMA 22nd Century Project を立ち上げました。22世紀に生きる子供達へというメッセージです。私達は街づくりをし。今の現代社会の課題を解決する、交通事故を減らそうはもちろんです。子供達とやってい

るのです。もっと言えば、現代社会の課題を解決しながら、子供達と一緒に未来の社会をつくっているのです。優しい心、技術もサービスも、受け取るのも生み出すのも人なんです。人の心を、優しい心に10年後、100年後していこう。22世紀に生きる子供達に、本気に今の自分の命の時間軸を越えて、目先じゃなくて、今の売り上げ、今の利益じゃなく、もっと未来の、私達はそういう思いでこのプロジェクトを世界にです、発信していこうとしております。ドキュメンタリー映画も作っていただきました。4年半密着していただきました、一昨年公開です。中国版ができて、今英語版が吹き替えて制作中です。これらは。本当に僕らの戦略的にやってることは1つありません。計画するなど社内には言っていますから。計画を見たら自分の考えた範疇しかできないものですから、それを越えるものがあるわけですね。10年前、私はここで話をすることなんて計画なんかできてないんです。何が大事かって、人の繋がりを、目の前の人の繋がりを大事にしていこうと、そう思っております。色々ですね、「宮田さんやってることいいね」と、こう言われることも一杯あるのですが、1つ気掛かりなことがあります。御遺族の御感情が、どのように思われているかなというのが、私の1つ気掛かりなことでありました。しかし、4、5年前に、お手紙を頂戴することがありました。そのお手紙を今日はお披露させていただきます。このお手紙はですね、亡くなられた男性の奥さんのお義母さん、義理のお義母様と同居をされてました。義理のお義母様から頂きました。

「新年あけましておめでとうございます。先日NHKのニュースで貴社の事故防止の取り組みを拝見しました。会社一丸となつての運動が、今他府県にも広まり、私共の娘婿の事故がきっかけと知り、私共も嬉しく思っております。あの時小学4年生だった孫も中学1年生となりました。朝元気に「行ってきま

す」の声を励みに楽しく暮らしております。毎日の生活の中で、今でも婿がいるかのごとく話の中に度々登場します。我が家ではお父さんがねとか、変わらぬ日々を送ってることをお伝えしたくてペンを取りました。放送していただき、私の気持ちに区切りが付いた思いです。これからも色々なことがあると思いますが、婿の残してくれた人への感謝を忘れず、3人で暮らしていきます。1つ気掛かりなことがあります。事故のお相手の方には、子供さんがおられると聞いています。奇しくも婿と同じ歳のご主人と、そのご家族が楽しい毎日を送られることを切に願っております。私の心の内を聞いていただきありがとうございます。貴社の益々のご繁栄を心よりお祈り申し上げます。」こういうお手紙を頂戴することができ、その不安は、確信に変わりました。事故を起こしてしまったきっかけは私の心にあります。社長になる前、専務という立場が長かったものですから、人からは、「社長と専務は違うやろ」と言われたら、いきがってですね、「一緒やん」と言っておりました。でも、全然違ったのです。トップになった瞬間に、何が違ったか。会社潰したらあかん。社員を路頭に迷わせない。経営者として数字を示さなあかん。残さなあかん。不安と怖れで毎日いっぱいなんです。不安や怖れ。何かあったらお客様にとかですね、従業員をなんとかせなあかん。それでこの命を奪ってしまう現実を目の当たりにし、自分の真実に向き合う勇気を頂



きました。本当に自分が何を大切にしないではいけないのか。不安や怖れで、経営や人生を歩んでいくのはやめようと思いました。思いっきり希望でいこうと。思いっきり夢や理想や、志、愛でいってやろう。覚悟して決めただけなのです。思いっきりいってやろう。そうしたら、本当にご縁が変わってきました。人の繋がりがどんどんどん変わってきました。自分の想像を越える広がり。まだまだですが、分かりませんが、自分がどうありたいか。どうありたいのか。経営って素晴らしいんですよ、企業経営は本当に、未来をつくっていける。社会を本当につくっていける事業経営というのがあるのです。そこを当に皆様と、また一緒に対話をし、素晴らしい未来をつくっていくことができると、そのように思います。今日は限られた時間で早口になり、動画も結構たくさんあります。ドキュメンタリー映画の紹介のVもありますが、多分出ないと思うんですが、またどこかで見ていただければと思います。「愛でいけるやん」という、そういう題名で、岩崎靖子、中務貴史監督が制作してくれました。またどこかで見ていただければというふうに思います。今日は本当に貴重な時間を先生に繋いでいただき、皆様とご縁を頂いたことを、本当に感謝申し上げます。本当に素晴らしい経営っていうものは、私はあると思います。また一緒にですね、知恵を出し合っていたらなというふうに思います。

はい、ありがとうございます。この映画は一昨年関西で上映会が始まりまして、コロナで中々集められないものですから、レンタルで今貸し出ししております。もしよければ、見られた人数で自己申告でということ、仕組みでやってるものですから、またよかったら見ていただけたらと思います。今日は本当にありがとうございました。